（4 月 29 日）「使徒言行録 22：6～11」
『主よ、どうしたらよいでしょうか』と申しますと、主は、『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる』と言われました。
（使徒言行録 22 章 10 節）

・使徒言行録 9 章に出てくる回心の物語を、パウロは自分の口で語ります。パウロの手紙の中では、あまりこの回心のことは触れられていませんが、今回はユダヤの民衆に対して語っていきます。
・回心物語を語るときには、「神さまに背いていた頃」の自分も語らなければいけません。そのため、語るのを躊躇してしまったり、語る相手を選んでしまったりということもあるでしょう。
・しかし、その罪や弱さでさえもまとめて受け入れて下さるのが神さまです。自分の弱さを誇りとし、自分の傷を隠さずに歩む。そのような信仰生活を生きることができれば、どれほど素晴らしいでしょうか。

（4 月 30 日）「使徒言行録 22：12～16」
アナニアは言いました。『わたしたちの先祖の神が、あなたをお選びになった。それは、御心を悟らせ、あの正しい方に会わせて、その口からの声を聞かせるためです。
（使徒言行録 22 章 14 節）

・パウロは強い光の輝きのために、目が見えなくなりました。しかし彼はそれ以前から、本当のものが見えず、キリスト者を迫害してきました。これは神さまが、「あなたは本当は見えていない」ということを教えられた出来事です。
・パウロの元に、アナニアという信仰のあつい人がやってきました。彼はパウロに「兄弟」と呼びかけます。教会でも「兄弟」「姉妹」とお互いを呼ぶことがあります。神の家族として、受け入れた証ともいえます。
・パウロはこの話をすることによって、ユダヤの人たちも自分は神の家族であるということを、思い出してほしいと思ったのかもしれません。見えなかったものを、自分と同じように見てほしいと願ったのでしょう。

2024 年 4 月

使徒言行録　　通　読

4 月

（4 月　1 日）「使徒言行録 17：32～34」
死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。
（使徒言行録 17 章 32 節）

・昨日（3 月 31 日）は、2024 年のイースターでした。イースターでは、イエス様がご復活なさったことを思い起こし、礼拝いたします。しかしこの「復活」という出来事を、なかなか受け入れることが出来ない人もいます。
・それはわたしたちが、自分の経験の中でしか物事を判断できないからなのかもしれません。しかし人間にはできないことでも、神さまはお出来になるのです。そのことをわたしたちは覚えておきたいと思います。
・アテネの人たちの中には、パウロの言葉を受け入れた人もいれば、その言葉を嘲笑った人もいました。その違いは、何だったのでしょうか。「見ないで信じる人」に、わたしたちもなりたいものです。

（4 月　2 日）「使徒言行録 18：1～4」
職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。
（使徒言行録 18 章 3 節）

・続いてパウロは、コリントへ行きます。ここにもパウロは教会共同体をつくり、のちに書いた手紙が聖書に残されています。その手紙については、8 月中旬から取り上げていきますが、良いことばかりが書かれていたわけではなかったようです。
・コリントには、アキラとプリスキラという夫婦がいました。彼らはイタリアから来ました。それはローマのクラディウス帝が、ユダヤ人をローマから退去させるように命じたからでした。
・理由はわかりませんが、結果として二人はパウロに出会うことができました。神さまのお導きです。そしてパウロと同じテント造りを職業としていた彼らは、一緒に働きます。福音宣教者も、自分の生活費は自分でまかなっていたのです。

（4 月 27 日）「使徒言行録 21：37～40」
千人隊長が許可したので、パウロは階段の上に立ち、民衆を手で制した。すっかり静かになったとき、パウロはヘブライ語で話し始めた。
（使徒言行録 21 章 40 節）

・同胞であるはずのユダヤ人から「その男を片づけろ」と叫ばれ、殺されそうになったパウロですが、彼は民衆に弁明をすることを大隊長に願います。ローマの大隊長はパウロがギリシア語を話せることに驚いたようです。
・大隊長はパウロのことを、暴動を起こし 4000 人の暗殺者を引き連れて荒れ野に行ったエジプト人だと勘違いしていたようです。神殿での騒ぎの大きさを考えると、それくらいの人物じゃないとおかしいと思ったのかもしれません。
・パウロは黙ってローマ兵と共に神殿を後にしてもよかったと思います。しかし彼は、ユダヤの民衆に語るのです。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか分からないのです」と十字架の上で語ったイエス様に倣っているかのようです。

（4 月 28 日）「使徒言行録 22：1～5」
「兄弟であり父である皆さん、これから申し上げる弁明を聞いてください。」
（使徒言行録 22 章 1 節）

・パウロは弁明を始めます。彼がヘブライ語で話し始めると、民衆は静かになりました。ユダヤ人であっても外国に住み、ヘブライ語を話せなくなる人は多かったからです。ユダヤ人のアイデンティティは言葉ではなく、律法と割礼でした。
・パウロはイエス様の福音を伝えるよりも前に、自分の過去について語ります。熱心に律法の教育を受けたこと、神さまに熱心に仕えてきたこと、そしてキリスト者を迫害してきたことです。
・教会でも、「信仰の証し」を語り合うことがあります。神さまに背いていた自分がどのようにして信仰に入ったのか、そのことを聞くことによって、神さまの招きを感じることがあります。そのような機会が増えるとよいですね。

（4 月 25 日）「使徒言行録 21：27～30」

彼らは、エフェソ出身のトロフィモが前に都でパウロと一緒にいたのを見かけたので、パウロが彼を境内に連れ込んだのだと思ったからである。

（使徒言行録 21 章 29 節）

・清めの期間が終わろうとしていたとき、事件は起こりました。パウロは神殿の境内にいたのですが、そのとき神殿の境内にいたトロフィモというギリシア人を、パウロが連れてきたとユダヤ人たちが勘違いしてしまったのです。
・エルサレムにいたユダヤ人は、元々パウロを批判的な目で見ていました。だから以前パウロと一緒にいたトロフィモが神殿の境内にいただけで、「これはパウロの仕業だ」と騒ぎ立てたのです。
・わたしたちにも、「思い込み」で物事を判断してしまうことがあると思います。「あの人は普段からああだから」といった先入観によって、誤った方向に事態が進むこともあります。パウロはユダヤ人に、捕らえられてしまいました。

（4 月 26 日）「使徒言行録 21：31～36」

しかし、群衆はあれやこれやと叫び立てていた。千人隊長は、騒々しくて真相をつかむことができないので、パウロを兵営に連れて行くように命じた。

（使徒言行録 21 章 34 節）

・ユダヤの人々は、パウロを殺そうとします。彼らの怒りは、神殿をパウロが汚したという思い込みから始まり、それが増長して膨れ上がっていきました。「暴動」はそのように起こっていくのです。
・しかしローマ兵がやってくると、彼らはパウロを打ち叩くのをやめます。自分たちの手を、血で汚したくないのでしょうか。イエス様が捕らえられたとき、ポンティオ・ピラトに責任を負わせようとした姿と重なり合います。
・そして大勢のユダヤの民衆は、「その男を片づけろ」と叫びます。人々がイエス様に対し、「十字架につけろ！」と叫んだ場面が思い起こされます。どうして人は、自分に反する人を排除しようとするのでしょうか。

（4 月　3 日）「使徒言行録 18：5～11」

ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。

（使徒言行録 18 章 9 節）

・パウロはユダヤ人相手に、熱心にみ言葉を語り続けます。しかしユダヤ人たちは反抗し、口汚く罵ります。彼らはイエス様がメシアであるというパウロの証しを、真っ向から否定したのです。
・パウロの心には、いらだちもあったのでしょう。「わたしは異邦人のところへ行く」と言い放ち、コリントでの活動を続けます。そのとき主は、幻の中でパウロに「恐れるな」と語ります。
・パウロの心はくたびれ、挫けそうになっていたのかもしれません。しかし主は、「わたしはあなたと共にいる」と約束されるのです。その結果パウロは、1 年半もの間コリントに腰を据え、み言葉を伝えていきました。

（4 月　4 日）「使徒言行録 18：12～17」

「この男は、律法に違反するようなしかたで神をあがめるようにと、人々を唆しております」と言った。

（使徒言行録 18 章 13 節）

・ユダヤ人には、アイデンティティがありました。彼らはさまざまな地域に住むことになっても、ユダヤ人として生きていくことを大切にしていました。そのしるしとなるのが、割礼と律法です。
・しかしパウロは、異邦人に対して福音を伝えるときに、割礼は必要ないと説きました。それがユダヤ人の言う、「律法に違反するようなしかた」に当たったのでしょう。彼らはそれがどうしても許せなかったのです。
・彼らはパウロを、ローマの総督に訴えます。おかしな話です。パウロが神さまの命令に背いているのであれば、神さまに訴えるべきでしょう。同じように教会で「おかしいな」と思うことがあっても、神さまに問いかけるべきだと思います。

（4 月　5 日）「使徒言行録 18：18～23」
「神の御心ならば、また戻って来ます」と言って別れを告げ、エフェソから船出した。
（使徒言行録 18 章 21 節）

・パウロは誓願を立てていたようです。誓願はいわば、ユダヤ教の伝統ともいえる行為です。パウロが何に対して誓願を立てていたのかはわかりません。宣教旅行での成果を求めていたのでしょうか。
・エフェソに戻って来たパウロは、その会堂でユダヤ人と論じ合います。文面から見ると、特に言い合ったわけでもないようです。それどころか、もっと長く滞在して欲しいと願われます。
・しかしパウロは、神さまのみ心のとおりに行動すると告げ、エフェソを後にします。16 章 6 節でパウロは、アジア州でみ言葉を語ることを聖霊によって禁じられていました。そのこともあったのでしょうか。そしてパウロはあらゆる場所を巡回していきます。

（4 月　6 日）「使徒言行録 18：24～28」
彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。
（使徒言行録 18 章 25 節）

・ここでアポロという人物が登場します。彼はイエス様に直接従った弟子ではなく、またパウロと一緒に行動していたわけでもありませんでした。イエス様の福音を知り、「伝えなければ」という思いに駆られたのでしょう。
・ただ彼は、ヨハネの洗礼しか知りませんでした。悔い改めの洗礼しか知らず、聖霊による洗礼を知らなかったということでしょう。本当の意味で、イエス様と出会っていなかったということかもしれません。
・プリスキラとアキラは、アポロを招きます。それは正確に福音を伝えるためです。アポロのことを否定するのではなく、福音をきちんと教え、さらにアポロの歩みを支える彼らの働きは、わたしたちも見習うべきところです。

（4 月 23 日）「使徒言行録 21：15～16」
数日たって、わたしたちは旅の準備をしてエルサレムに上った。
（使徒言行録 21 章 15 節）

・多くの人々が、パウロのエルサレム行きを止めようとしていました。パウロと一緒に行動していた人たちも、エルサレム行きには反対していました。しかしパウロは説得を聞き入れようとはせず、エルサレムに向かいます。
・もしあなたが同行者だったら、どうしていたでしょうか。「行くなら一人で行ってきなさい」と、冷たく別れを告げはしないでしょうか。エルサレムに行けば、危険なことが起こることは明白なのです。
・聖書には、パウロと共に多くの人がエルサレムに向かったと書かれています。「主のみ心がおこなわれますように」と祈りつつ、パウロを見捨てることはしませんでした。パウロはうれしかったことでしょう。

（4 月 24 日）「使徒言行録 21：17～26」
この人たちがあなたについて聞かされているところによると、あなたは異邦人の間にいる全ユダヤ人に対して、『子供に割礼を施すな。慣習に従うな』と言って、モーセから離れるように教えているとのことです。
（使徒言行録 21 章 21 節）

・パウロはエルサレムで、ヤコブや長老たちに会います。そして異邦人（ユダヤ人以外の人たち）の間で起こった神さまのみ業について報告します。エルサレム教会の人々は、それを手放しで喜んだでしょうか。
・人々はこれを聞いて神さまを崇めますが、あわせてパウロに苦言を呈します。それは「あなたは異邦人の間にいるユダヤ人に対して、割礼などの律法を守るなと言っているだろう」ということです。ただ聖書を読む限り、パウロはそのようなことは言ってはいません。
・ヤコブたちはパウロが律法を守る人間だということを周りに知らしめるために、誓願を立てた人が頭をそるための費用を出すように提案します。さらにパウロにも身を清めるように言います。「ユダヤ人を得るために、ユダヤ人のように」なるのです。

（4 月 21 日）「使徒言行録 21：1～6」

わたしたちは弟子たちを探し出して、そこに七日間泊まった。彼らは“霊”に動かされ、エルサレムへ行かないようにと、パウロに繰り返して言った。

（使徒言行録 21 章 4 節）

・パウロはエフェソを離れ、エルサレムに向かって進みます。1～3 節には多くの地名が出てきます。聖書の巻末にある聖書地図（ついていない聖書もあります）をたどっていくと、いかに大変な船旅だったかがわかります。
・ティルスに 7 日間滞在しているパウロに対し、そこにいた弟子たちはエルサレムに行かないように繰り返し言います。彼らは自分の思いを言っているのではなく、霊に促されて語っていました。
・パウロはその言葉に反して、旅を続けます。一見すると、パウロは霊の導きに逆らっているようにも思えます。それとも霊はパウロに、これから進む道は険しいということを伝えようとしたのでしょうか。

（4 月 22 日）「使徒言行録 21：7～14」

翌日そこをたってカイサリアに赴き、例の七人の一人である福音宣教者フィリポの家に行き、そこに泊まった。

（使徒言行録 21 章 8 節）

・聖書は福音宣教者フィリポのことを、「例の七人の一人である」と紹介します。「例の七人」とは使徒 6 章 1～7 節にある、食事の世話などをするために任命された人たちです。その中には石を投げつけられて殉教した、ステファノの名前もありました。
・ステファノが殺害されたころ、パウロ（その頃はサウロと呼ばれています）はキリスト者を迫害していました。さらにパウロはステファノの殺害に賛成し、その場にいて石を投げる人々の上着の番をしていました。フィリポとパウロはどんな会話をしたのでしょうか。
・預言者アガボを始め、パウロに同行していた人さえも、エルサレム行きをやめるように懇願します。どこに神さまのみ心があるのか、だんだん不安になりそうですが、それでもパウロは説得を受け入れませんでした。

（4 月　7 日）「使徒言行録 19：1～7」

そこで、パウロは言った。「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めの洗礼を授けたのです。」

（使徒言行録 19 章 4 節）

・この時代、パウロ以外にもイエス様の福音を伝える人たちは多くいたようです。その一人が昨日の箇所に出て来たアポロでした。しかし彼らの中には、「ヨハネの洗礼」のみを知り、それだけを伝えている人も多くいました。
・洗礼者ヨハネは、「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と語ります。
・その方こそイエス様であり、パウロが「わたしよりも優れた方」と呼んだ人物です。パウロは人々に、イエス様の名による洗礼を受けるように、そして聖霊を受けるようにと促すのです。

（4 月　8 日）「使徒言行録 19：8～10」

このようなことが二年も続いたので、アジア州に住む者は、ユダヤ人であれギリシア人であれ、だれもが主の言葉を聞くことになった。

（使徒言行録 19 章 10 節）

・18 章 21 節でパウロは、「神の御心ならば、また戻って来ます」と言ってエフェソを後にしていましたが、今回、戻ってくることとなりました。それも二年間、彼はエフェソにいたようです。
・最初はかなくなで信じようとしなかった人たちが、会衆の前でパウロの言葉を非難していました。パウロはその人たちを説得しようとはせずに、彼らから離れて弟子たちもそこから退けました。
・熱心に反対者を説得するよりも、イエス様の福音を一人でも多くの人に伝えることを、パウロは選びます。「聞く耳を持たない人」は神さまにお任せして、自分は他の場所に向かう。教会もそのような姿勢に学ぶところがあるかもしれません。

（4 月　9 日）「使徒言行録 19：11～16」
悪霊は彼らに言い返した。「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ。」
（使徒言行録 19 章 15 節）

・パウロが身に着けていた手ぬぐいや前掛けを持って行って病人に当てると、病気はいやされ、悪霊も出て行ったとあります。この記述だけをみると、なにやら胡散臭い宗教のようにも感じます。
・しかしこれは、パウロを用いることによってイエス様の福音に目が向くようにと、神さまがなさったことなのかもしれません。「パウロというすごい男がいるらしい」、「その男が伝えるイエス様というのは救い主だということだ」。このような噂があふれたことでしょう。
・しかし、その噂に便乗しようとしていた人たちがいました。ユダヤの祈祷師です。彼らはイエス様の名前を使ってみようと、「試み」ました。しかしそれは、通用しません。イエス様を心から信じないと、祈りの言葉も意味をなさないのかもしれません。

（4 月 10 日）「使徒言行録 19：17～20」
信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。
（使徒言行録 19 章 18 節）

・このような箇所は、慎重に読まなければならないと思います。昔あるキリスト教の教派の方が、ひな人形を捨てさせられたという話をされたことがあります。とてもショックをうけたことを思い出します。
・たしかに他の宗教のものかもしれませんし、そこにはその教派が大切にするものとは相容れない考え方があったのかもしれません。しかしそのひな人形に対する誰かの思いが踏みにじられたような気がします。
・大切なのは、手放すなら自分の思いで、ということではないでしょうか。誰かに命じられたり強要されたりするのではなく、「わたしにはもうこれは必要ない」という思いでおこなうのであればいいと思います。「恐れ」によって、というのはいかがなものでしょう。

（4 月 19 日）「使徒言行録 20：32～35」
ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。
（使徒言行録 20 章 34 節）

・パウロはエフェソの長老たちを、神とその恵みの言葉とに委ねます。恵みの言葉とは、イエス様のことを指しているのかもしれません。「初めに言があった」から始まるヨハネ福音書を思い起こします。
・そしてパウロは、「受けるよりは与えるほうが幸いである」というイエス様の言葉を引用します。たとえばクリスマスや誕生日に、誰かのためにプレゼントを用意したがあると思います。
・サプライズでもらうのも、確かにうれしいことです。しかし「何がいいかな」と考えた末に選んだプレゼントが喜ばれたら、その喜びは大きなものになります。それが神さまの福音、「グッドニュース」であれば、なおさらなのではないでしょうか。

（4 月 20 日）「使徒言行録 20：36～38」
特に、自分の顔をもう二度と見ることはあるまいとパウロが言ったので、非常に悲しんだ。人々はパウロを船まで見送りに行った。
（使徒言行録 20 章 38 節）

・パウロがエフェソの教会にいたのは、三年間だったそうです。その期間に、彼らは強い信頼関係を作っていました。パウロが「自分の顔をもう二度と見ることはあるまい」と言ったことも相まって、人々は激しく泣きました。
・「神ともにいまして」という聖歌があります。（日本聖公会聖歌集 522 番）教会ではお葬式のときに用いられることが多いですが、送別会などでも使うことがあります。「また会う日まで」という歌詞が、悲しみを誘います。
・しかし涙の中に、神さまはいつも共にいて下さるという確信があります。たとえ地上で会うことが適わなかったとしても、神さまのみ許で共に憩うその日を思い、歌うのです。パウロはエフェソを離れ、エルサレムに向かいました。

（4 月 17 日）「使徒言行録 20：17～24」
しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。　（使徒言行録 20 章 24 節）

・昨日の箇所には、パウロは「エフェソに寄らないで航海することに決めていた」と書かれていました。五旬祭に間に合うためには、エフェソで時間を取るわけにはいきませんでした。しかし素通りすることもできません。
・パウロはエフェソに人を遣わし、長老たちを自分の元に呼び寄せます。パウロは彼らに、自分がこれまでどのようなことをしてきたかを熱く語っていきました。
・そしてパウロは、エルサレムに行くことは霊による働きであること、そしてそこにはきっと投獄と苦難が待ち受けているだろうということを語ります。しかし自分の命を神さまが用いて下さるという思いを持つパウロは、その道を走り抜けることを誓うのです。

（4 月 18 日）「使徒言行録 20：25～31」
そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。　（使徒言行録 20 章 25 節）

・パウロは 2 度とエフェソの人たちと会うことがないと、分かっていたようです。これからエルサレムに向かうパウロの前には、大きな困難が立ちはだかっているのです。手紙は書けるかもしれませんが、直接語りたいことは山ほどあったでしょう。
・パウロがエフェソの長老たちを呼び寄せて語ったのには、理由がありました。それは監督者である彼らに、羊の群れであるエフェソの人々を任せたからです。自分に代わって、人々を導いて欲しいということです。
・パウロにはもしかしたら、自分がエフェソに残っていた方がよいのではないかという思いもあったかもしれません。しかし彼は、長老たちを信じ、委ねました。その後ろにある、神さまの導きを信じたのでしょう。

（4 月 11 日）「使徒言行録 19：21～27」
諸君が見聞きしているとおり、あのパウロは『手で造ったものなどは神ではない』と言って、エフェソばかりでなくアジア州のほとんど全地域で、多くの人を説き伏せ、たぶらかしている。
（使徒言行録 19 章 26 節）

・エフェソにいたパウロは、エルサレムに行くことを決心します。パウロの手紙の中にはエルサレムの教会の貧しい人に対して、マケドニアとアカイアの人たちから献金を預かったという記述があります。その献金を持って行くという目的もあったのでしょう。
・パウロはこれまで、ユダヤ人と多く対立してきましたが、今回はデメトリオという異邦人の銀細工師との騒動が記録されています。デメトリオはアルテミスの神殿の模型を銀で造り、職人たちに利益をもたらしていました。
・しかしパウロは、「手で造ったものなど神ではない」と、その「仕事」を批判します。さらに多くの人たちを改宗させていきました。デメトリオは危機感を覚え、人々を扇動しようとします。

（4 月 12 日）「使徒言行録 19：28～34」
他方、パウロの友人でアジア州の祭儀をつかさどる高官たちも、パウロに使いをやって、劇場に入らないようにと頼んだ。
（使徒言行録 19 章 31 節）

・デメトリオに扇動された人々は、パウロの同行者二人を捕らえて劇場になだれ込みます。しかしその中の大多数は、一体自分たちは何のために集まったのかさえ分からなくなっていきました。いわゆる群集心理です。
・パウロは同行者の身を案じたのでしょう。劇場の中に入って群衆と対峙しようとします。しかしそれをパウロの友人であるアジア州の議員たちはやめさせます。パウロに危険が及ぶのを察知したのでしょう。
・一度火のついた群衆の心をおさめるのは、なかなか難しいものです。説得などの声も届かず、彼らは叫び続けます。その中にはもしかしたら、ただ叫びたくて集まってきたような人もいたかもしれません。

（4 月 13 日）「使徒言行録 19：35～40」
諸君がここへ連れて来た者たちは、神殿を荒らしたのでも、我々の女神を冒瀆したのでもない。
（使徒言行録 19 章 37 節）

・群衆による騒動を静めたのは、町の書記官でした。しかし彼は、パウロたちの考えに賛同していたわけではありません。それよりもまず、エフェソの人々のアルテミスに対する信仰を肯定していきます。
・アルテミスは女神だったようですが、その存在自体は否定されていないはずだ。そして神殿も荒らされておらず、また冒涜もされていない。だから何かあるのであれば、ちゃんと裁判に訴えなさいと、書記官は言います。
・至極真っ当なことを、書記官は語っています。しかしその裏には、「暴動の罪の責任は負いたくない」という思いがあったようです。町の秩序を守ることを再優先にした彼の判断は、正しかったと言えるでしょうか。

（4 月 14 日）「使徒言行録 20：1～6」
この騒動が収まった後、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げてからマケドニア州へと出発した。
（使徒言行録 20 章 1 節）

・パウロはエフェソで、弟子たちを呼び集めて励ましました。異邦人の地に残され、宣教をおこなっていくことになる弟子たちはきっと、不安で一杯だったことでしょう。その彼らを、パウロは励ますのです。
・この励ましは、どのようなものだったのでしょうか。言葉を尽くしてと書かれていますが、単なる言葉がけだけではなかったと思います。熱い祈りや、神さまへの執り成し、そのような時間が費やされたのだと思います。
・パウロがエルサレムに行くにはシリア州を通った方が近いのですが、ユダヤ人の陰謀のためにマケドニア州に向かうことになりました。ただこれも、神さまのご計画なのだと思います。パウロの同行者の名前も、かなり増えてきました。

（4 月 15 日）「使徒言行録 20：7～12」
エウティコという青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。（使徒言行録 20 章 9 節）

・何とも不思議な話が載せられています。「長い長いお話し」、苦手だという方おられると思います。礼拝の説教中も、ついつい舟を漕いでしまうという方、おられることでしょう。パウロも夜中まで話続けていたようです。
・広間は人で一杯だったのでしょう。エウティコという青年は、三階の窓枠に腰かけてパウロの話を聞いていました。パウロの話がつまらなかったのかどうかは分かりません。ただ彼は眠りこけ、三階から下まで落ちてしまいました。
・パウロは落ちて死んでしまったエウティコを抱きかかえて、生き返らせました。「わたしの話をちゃんと聞かないからだ」と怒ることはありませんでした。そしてパウロはさらに、夜明けまで語り続けたそうです。

（4 月 16 日）「使徒言行録 20：13～16」
翌日、そこを船出し、キオス島の沖を過ぎ、その次の日サモス島に寄港し、更にその翌日にはミレトスに到着した。（使徒言行録 20 章 15 節）

・パウロは先を急ぎます。それは五旬祭には、エルサレムに到着したいという思いがあったからです。五旬祭とはユダヤ教の祭りで、穀物の収穫を感謝し祝う日でした。申命記 16 章 11 節に書かれています。
・しかしキリスト教にとって五旬祭は、もっと大きな意味を持つ日となりました。使徒言行録 2 章にある「聖霊降臨」の出来事があった日です。エルサレムで祈る弟子たちに聖霊が降ったその日までに、パウロ自身もエルサレムに行きたいと願っていました。
・パウロの手には、エルサレム教会の貧しい人に対する献金もありました。聖霊が降り注いだ記念の日に、共に喜びたいという思いもあったのかもしれません。わたしたちも、聖霊降臨日（ペンテコステ）を、大切に覚えていきたいと思います。